

豊臣期における金銀遣いの浸透過程

盛本昌広

The Circulation of Gold and Silver during the Toyotomi Regime

はじめに

- ① 豊臣政権の贈答儀礼と銀遣い
- ② 東国における金遣いの浸透
- ③ 『天和田重清日記』に見る銀遣いの浸透過程
- ④ 京における銀遣いの浸透過程
おわりに

【論文要旨】

近世の東日本では金遣い、西日本では銀遣いであったが、金銀遣いがどのような過程で、いつ頃から成立したかは明確ではなかった。本稿は豊臣期に焦点をあてて、金銀遣いの浸透過程に検討を加えたものである。

豊臣政権では①年頭祝儀の際の中国・九州大名からの銀献上、②端午・重陽・歳暮の際の帷子・小袖の献上、③御成の際の銀・小袖の献上、④公家成の際の御礼の献上などが行われ、豊臣一族の手元に銀や小袖が集積された。東国の金遣いは宗教者への布施・礼金に始まり、後北条領国では金による税の納入、徳川家の関東国替後の江戸での米の換金が行われ、金遣いが浸透していた。銀遣いは京では文禄年間に本格的となり、慶長年間には一般化し、小額取引も銀が使用され始めた。京以外では博多・堺など海外貿易と関係が深い町でも銀遣いが浸透していた。

絹織物の需要は増大し、大名は①献上・贈答用の小袖・帷子、②儀式や日常生活に

着用する衣服を確保する必要があった。また、地方にも京風のライフスタイルが広がり、高級絹織物の需要は拡大した。その結果、絹織物や生糸の輸入が拡大し、取引が盛んになり、決済手段としての銀の流通量の増加が要請され、市場への銀の放出が促進された。豊臣家・大名・朝廷・寺社に集積された銀は①小袖や絹の代金の支払い、②寺社への寄進行為、③職人への工資の支払い、④下級者への下賜、⑤饗応の飲酒物の代金の支払い、などによって市場に放出され、町人や下人にも銀が回るようになった。

また、朝鮮侵略の際には、銀不足に対応して秀吉が鑄造させた銀貨、名護屋在陣中の大名による銭と銀の交換により、名護屋周辺には銀が大量に放出され、銀遣いの浸透を促進した。